

## 青春ドラマ

### —運命の奇跡

新潟県 若月 太郎兵衛

昭和二十年九月中旬、ラーゲル抑留生活の始まり  
パーム収容所

我々はどういうことか、まさか、不吉な予感が脳裏をさえぎった。とにもかくにも、荷物をまとめて下車した。名簿も部隊も構わない五百人さえいればいいのだ。もう人間でなく品物扱いと同じだ。命ぜられるままに我々は疑心暗鬼、とぼとぼと一キロあまり歩いた。うす汚い工場らしきものが見えてきた。聽て大きな木造の建物が三棟ほどある。ここがラーゲルなのだ。オンボロの空き家である。囚人の住家である。もちろん電気もない、水もない、屋根があるだけだ。我々は指示に従って寝台を松板のコワを並べて釘を打ち、つくらされた。これでは凸凹だらけで寝られたものではな

い。臥薪嘗胆幾辛酸、唄の文句じゃあるまいし、背中が痛くて寝られない。とっさに私は閃いた、厩だ、敷藁だ、厩へ飛んでいった。馬夫にタバコを一本サービスして毛布にいっぱい敷藁をねだった。彼は快く持っけていきなとくれた。私は毛布いっぱい敷藁を寝台の上に広げ、その上に毛布を敷き釘どめにして一丁上がり。ごろりとその上に寝てみた。もくもくして心地よし、立派な寝台ができた。人生三分の一は寝るんだ、おろそかにはできない。他の兵たちは若月はいつでも要領がいいんだ、どこから藁をせしめてきたんだと、早く厩へ行つてこい。兵士たちはどつと厩めがけて殺到した。馬夫はおどろきネリジャ、ネリジャ駄目だ、馬が風邪をひく、飼料もなくなる、帰りなさい。皆、毛布一枚持つてしよぼしよぼと帰ってきた。

そこで私は考えた、私ばかりぬくぬくと寝ていられない、何とかせねば。私は大隊長に進言した。休日を利用して五百人全員で枯れ草の採集をし、寝台づくりをすべきである。大隊長はそれは名案だ、実施することになった。それから五百人は人間を取り戻したと大

喜び。

五百人の集団は、将校団五十人、一二三師団司令部要員、警察官、特務機関、他情報関係の雑多な集合体である。

翌日から外柵用の松杭切り、屋内清掃、炊事場の整備、自炊薪の採集などなど、作業班を作り仕事を始めた。三重のエガベンスを張る。多分ドイツの捕虜でも来るのだろう。自分たちのためのものとは考えられなかった。

大体の住家もできた。今度はいよいよ煉瓦工場の復旧工事である。朝、八時になると工場の汽笛が鳴る。嫌な作業が待っている。

木材運搬と女性監督ホーチャ

バーム女性監督ホーチャは小柄な丸顔の四十歳ぐらいの可愛い小母ちゃんで、先祖は日本人だったとか、人なつっこい女性である。彼女は我々を戦争の犠牲者だ、気の毒だ、一日も早く日本へ還してやりたい、親兄弟妻子も首を長くして待っているでしょう、君たちには罪はない、罪は帝だ、一握りの軍財閥だ。ソ連人

と君たち労働者、農民は皆兄弟だ、我々には国境は要らない。事故でけがをしないように、凍傷には絶対ならないように気をつけなさい、我々は大切なあなた方をお預かりしているの、もしものことがあったら申し訳ありません。困ったことがあったら私に言いなさい。赤鬼の国へ来て、こんな言葉を耳にするなんて、夢にも思わなかった。耳を疑いたくなる。しかしホーチャの言葉には嘘がない。人間愛ヒューマニズムだ真実だ。我々こそ、今までだまされてきたのだ。はてな、これは買取か、懐柔か、眉つげか、ゆっくり時間をかけて見ることだ。本物か、偽善か、それにしてもよい監督にめぐり合わせたものだ。すさんだ我々の気持ちも大いに和らいだ。この監督の指示で木材運搬が始められた。

私は木材運搬はお手の物だ。一番大きい物からどんどん運んだ。他人の持てない物を片っ端からいとも簡単に運ぶので皆驚いている。私のほかにもう一人おった。彼も玄人である。三、四日続いた。そして一段落しハラシヨラポータ、作業優秀者として表彰された。

賞品も出たのである。賞品は何が出るのであろうか。ついに出了。お米である。命の糧でもある。量は驚くなかれ缶詰の小缶に一杯。日本では私は稲作農家だ、百五十俵もあるのに、情けない。それでも誰もお米を拜むこともできないのだ。皆にわけてやるほどの量でもない。私ばかり、よだれ垂らしている皆の前でどうして食べればよいか迷った次第です。これも一つの思いの部に入りました。

煉瓦工場は鉄道省のもので全部レールが敷設してあります。一号から十号ベエチカ、レンガ焼の釜で大きい釜は生レンガを積み込むのに二十人くらいで一か月もかかります。製品となり貨車六十トンに積み込むのに一週間もかかります。何車両も一回に焼き上がるのです。年間割当は百五十万枚です。工場長はノモンハン事件に参加し負傷した軍人上がりで、いつも勲章略綬をつけていました。

凍てつく北緯五十五度、北樺太の北端と同緯度、人間の住む限界点バーム収容所である。煉瓦の原料粘土は一枚岩のように凍ってツルハンシもパールも受けつけ

ない。仕方なく電柱のような材木を一日じゅう燃やして掘るのだが、二〜三升ぐらいしか掘れない。ジレクトル、ザオーダ工場長は飯にもパンにもならぬとかんかに怒っている。怒ったってどうにもならぬのに自然現象、寒いのだからどうしようもないじゃないか。

そのころ、我々の食糧がなくなり底をついていた。一日の食物はスープ水と岩塩に馬鈴薯二〜三個、黒パン三百グラムのほかはなにもない。自分の身を食うほかなかった。肋骨は洗濯板、湯たんぼだ、栄養失調だ。それも切れた、何もない絶食だ。それでもサイレンが鳴れば作業整列だ、工場へ皆出かけた。仕事どころではない。生ける屍だ。ホーチャは、仕事は休みだ、ストープの回りに集まりなさい、お話でもしましょうという。空腹を抱えていい話も出るわけもない。それでも心温かなホーチャの心づかいが地獄に仏というところだった。腹が減って声も出ない我々を我が子のようにとおしむ。彼女は観世音菩薩のようであった。突然ドアを蹴るようにして工場長が怒鳴り込んできた。ポチム、ニエラポータ、なぜ仕事をしないのか、

ホーチャ、彼女は毅然と立ち上がった。ヤボンスキー、サルダート、日本の兵隊さんは何にも食べていけないのです。ソ連人は何も食べなくとも働きました。預かっている日本の兵隊さんを何も食べさせずに働かせることはできません。ソ連の恥と思いませんか。彼女の言動態度は残念ながら日本では見られない光景でした。実に感動しました。工場長は帰す言葉もなく、勝手にしやがれと立ち去りました。工場長は先にも述べたとおりノモンハンで日本軍にかたわにされた恨みがこびりついているのです。

バームで二年近くホーチャとかかわりを持って暮らしてきました。やがて第一次が帰り、我々残り二百人はチタへ転属することになりました。ホーチャは目を真っ赤にして泣きながら一時も早く平穩に日本海を渡ってください、家族が待っていますから、ご苦労様でした。これがソ連人だ。このソ連人と戦えるか、我々は日本軍国主義こそ敵だと憎むようになった。同じ人間同士、何で戦わねばならぬのだ。ヒューマニズムだ、人間愛だ。平和の架け橋となることだ。ホー

チャは国境を越えて我々に多くのことを教えてくれた。ホーチャは丈夫で暮らしているだろうか。一度、会いたい。

イワノフ・ホーチャ、我々は一生あなたを忘れない。国境を越えたヒューマニズム人間愛、正義感、勇敢に自分の意思をたとえ誰であろうと恐れることなく主張する女性、すばらしかった。そしてあなたはいつでもどこでも惨めな我々にパンをタバコを与えてくれた。あなただって配給なのに、我々は偶然ながら幸せだったのだ。

六十何万の戦友は恐らくそうしたことはないだろう。ホーチャありがとう。日本の皆さんはだまされたんだというが、そうではない。人間の良心真理だと私は反撃するのだ。既に四十五〜六年経って、あなたは八十年代だ。いいお婆さんになっているはずだ。生きておられるだろうか。当時二十六歳ぐらいの私でも七十二歳になってしまったのだから、本当に一度でいいからお会いしてお礼やお話しなどしたい。元気で生きていてください。

満蒙開拓青少年義勇軍五十人の小隊長として

昭和二十一年、私は少年兵の小隊長に任命された。

かわいい紅顔の少年兵十七歳〜二十歳くらいの若者たちだ。かわいくてならぬ。私は彼らの兄貴分、毎日彼らを連れていろいろの作業に従事していた。ある日、

薪割り作業を命ぜられた、ペーチカ用の薪、ソ連軍用の薪を割る仕事であった。少年兵が知らずにソ軍用の薪を割った。大部余計に割ってしまった。さあ大変。

メヤニ、ニックネーム、収容所の係長、いつも目やにをハンカチで拭いてばかりいるのであだがメヤニになったのだが、かんかんに怒った。誰が割った、割ったやつは出てこい、営倉だ、罰だとながなり立てている。

日本将校は私に割った少年兵を出せと言っている。私は、責任者は私だ、少年兵は出さぬ、私が営倉に入ると言った。それでいいのだ。私は即座にあのせま苦しい、寒いお粗末な営倉にたたき込まれた。もうこうなれば運は天任せ。まだこれしきでは死なないぞ。じつと我慢することだ。と自分に言い聞かせ、落ちつきはらっていた。だんだんお腹は減ってくる。夜はしんし

んと更けていく。外は零下四十度、人間の住む限界点と言われているバーム。北緯五十五度北樺太の北端と同緯度、寒い盛りは零下七十度まで下がるところである。

雪国育ちの私ではあるけれど、これではちょっと酷暑すぎる。それにしてもまさか冷凍になることはないだろう、守衛所と同じ屋根の下なんだから、ペーチカもあるし心配無用だと思っていた。これも私の運命なんだ。神も仏もないんだ、私は二十六歳だ。こんなことぐらいで死にはしない。死ぬよりまだ楽だと考えていた。

寒気は足の先や手指の先から忍び込んでくるようにしんしんと迫ってくる。外は零下五十度ぐらいになるのだ。営倉はそれでも衛兵所の同じ建物の一部にあるので、冷凍になることはないと思っていた。それにしても空腹と寒さ、幾ら楽観主義者の私でもこたえた。故郷に思いを馳せたり、今は亡き戦友のことを考えたり、ただ一人の弟はビルマ戦線でどうなっているだろうか、などなど、眠るどころではなかった。

長い一夜はあけた。朝だ、少年兵が二、三人黒パンを持って差し入れに来てくれた。食べきかりの者が自分の給食分を我慢して私のために持ってきてくれたのである。少年兵の皆さん、ありがとう、自分の命を僕のために分けてくれたのです。経験した者でなければわからない、そのありがたさ。生ける屍、栄養失調の少年が私を死なしてはならぬと、皆でパンを少しずつ我慢して寄せ集めカンパしてくれたのです。温かいその思いやり、私は、感激に咽びながらいただきました。本当に私は幸せだなと空腹も寒さも吹き飛んだ感じでした。塚本通訳は私を立派な人間だ。ハラシヨラボータだと盛んにソ連側に陳情し早く釈放するよう運動してくれました。おかげで三日ぐらいで釈放されました。

少年兵は涙しながら私を迎えてくれました。

少年兵こそ満州に骨を埋める覚悟で、家庭や国家のために不返転の決意で出てきたすばらしい若者たちなのです。かわいいじゃありませんか、誰もできることではないのです。勇敢な雄々しい方々なのです。皆よい子ばかりでした。今、日本国じゅう至るところでそ

れぞれ立派に成功して活躍されておられることでしよう。

戦友愛、私の命は戦友が分けてくれたものだ

昭和二十一年、バーム収容所へ来て三か月一度も入浴していない。体じゅうシラミだらけ血を分けた兄弟で衣類・外套まで虫と卵が充滿している。食物はなく栄養失調・肋骨は洗濯板・湯たんぼのようにながった。

余りかゆいので無意識のまま体をかくと爪に何匹ものシラミが引っかけかってくる。夜、外套を屋根の上に広げて寒気滅菌をやる。成虫は死ぬけれど卵は死なない。悲惨なものだ。今の日本ではシラミの現物など見ることが出来ない、幸せな時代だ。

隣部落にバーニヤがある。囚人部落だ。刑期を終わった人たちが住みついたのだ。共同浴場のサウナ風呂で久しぶりに入浴ができることになった。

重い防寒外套の集団は順番が来ると整列点呼をして二キロくらいを徒歩で出かけた。驚いたことにこの地区一番の権力者の指示部員・青帽が二十四時間不眠不

休で薪割りをやりながら、火をたき、湯加減を見ながら我々の入浴がスムーズにできるよう援助していた。薪割りの要領も手や足をけがしないようにと、手とり足をとり斧の振り落とし方まで一人一人丁寧に指導していたのである。日本では偉い人ほど何もしないのが常識だ。威張るぐらいのものなのに、さすがは社会主義ポリシエビイキ党員だなと感心した。大衆奉仕・犠牲的精神・大いに勉強になった。

私は脱衣してあとはシラミ退治の高温滅菌室の当番兵に任せ、サウナに入った。皆久方ぶりの入浴で身も心も軽くなり生まれ変わったような気分でサウナから上がってきた。さあ大変、私の衣類がない。一瞬、やられたと思った。私はこのままでは心までも凍るような冬は越せない。誰も余計な物はなく、お互い着のみ着のままなのだ。私は死ななければならぬ。おおよそ誰が取ったかは分かっているけど、そいつをやっつけても盗まれた物はかえってこない。やつはソ連人とパンやマホルカ（煙草）等と交換して、しこたま抱えていたのである。彼は常に旅の恥はかきすてだと、うそ

ぶいている最低の人間なのだ。私だけでなく他にも被害者がいたのであろう。私はまさに追はぎにあい裸にされたのである、零下五十度のシベリアで。

事件を知った戦友たちは、皆、同情はしてくれただれど、どうにもならぬ。そのとき、先輩の星野軍曹（栃木県出身）は、自分の着ていた真綿の防弾チョッキを脱ぎ「これを着よ」と私にくれた。「それでは先輩が風邪をひきます、だめです」と返そうとした。先輩は「遠慮なく着るんだ、死ぬときは一緒だ」先輩は直ちに私のために全員にこの次第を説明して衣服のカンパを訴えてくれました。おかげで私は命を救われた次第です。

星野さんほかカンパをしてくださった戦友の皆さん  
ありがとうございます。

それから春夏秋冬となりバーム駅で貨車に木材を積む作業がありました。三十トン貨車に満載し、もう一本で終わりのときでした。どうも最後の一本積むと崩れそうな予感がしました。半分逃げ支度で積んだとたんガラッと崩れてきました。すかさず飛び下りて逃げた

けれど、防寒靴が木材にはさまれ、逃げ切れず木材もろとも貨車から墜落し、線路脇の側溝にはまりました。そこへ木材が落下して私は下敷きになりました。

私は気絶しました。もちろん目も見えない、耳も聞こえない、痛みもない、意識がなくなりました。仮死状態になったのです。戦友はとっさの出来事にあわてふためき、木材を取り除き人口呼吸をやってくれました。数分後私は息を吹き返しました。戦友たちは防寒外套を二つ合わせて応急担架をつくり私をそれに乗せ医務室へ運んでくれました。途中、バラケリフ上級中尉ラーゲル所長の自宅へペイチカづくり行っていた高橋弥蔵君（山形県出身）が知らせを聞いてびっくり。今夜は所長さんの奥さんからバケツに一杯の馬鈴薯をもらい、それを蒸して出来上がったところを皆に腹いっぱい食べて、喜んでもらうんだと待っていた矢先の出来事であった。彼は夢破れて音を立てて泣いていた。彼は、私が担架などに乗せられているので、たっぷり死んだと思ったようです。

私の入院診察の結果は、左足のひざの側面を木材に

やられた部分が奇跡的にも打撲傷三週間程度で、二三日松葉杖に頼る程度で大した怪我ではありませんでした。これも皆神仏のご加護と感謝した次第です。

高橋君は飛んできました。思ったより軽傷なので、うれし泣きに泣きました。それから彼は毎日朝夕黒パンを半分分けて私のところへ持ってきてくれました。早く治ってくれ、早く元どおりになると、自分の身を削りながら私を助けてくれたのです。親身に勝る親切とはこのことだと思います。すばらしい戦友を私は一生忘れてはならぬのです。私ほど幸せな者は余りないでしょう。私の現在あるのも、すべてこうしたすばらしい戦友に命を分けてもらったお蔭なのです。戦友愛という言葉は知っていても身をもって体験を語れる人は数少ないと思います。

戦友に助けられ命を分けてもらった私は戦友のために一生懸命報恩感謝のまことを捧げることだと深く心に刻み込みました。ひと冬の間に我々の第六收容所第八支部、バーム五百人中死亡した者は、栄養失調で亡くなった者十九人、絶望悲観して割腹自殺した右谷小尉、



計二十人でした。我々と分かれてエロフェイに行った戦友は四十五人も亡くなっています。モロドイでは五百人中、シラミによるバラチフスでわずか一週間のうちに二百七十人も亡くなりました。それも若い初年兵ばかりであり旧軍隊の支配がそうさせたのです。許されません。断腸の思いです。

バームの我々は幸せな方だったと思います。シベリアの永久凍土に眠って、といわれてもお腹が空っぽでは眠れません。白い飯をお腹いっぱい食べて死にたい、シベリアのすべての合言葉でした。

昭和二十二年六月 怒濤隊長に選出さる

五百人のうち三百人がダメイすることになった。体の悪い者、弱い者、三級オーカー・ハラショラポート・作業優秀者等となっていた。私もリストに載っているという。夢のような嬉しい情報が飛んできた。ある日、相沢通訳が、若月君残念なことになったぞ、君はハラショラポートで一番早くリストに載っていたが、だれか君を憲兵だと告発したので、赤線を引かれてしまったと云った。私は一瞬深い穴のドン底へでも突き

落とされたような衝撃を感じた。私は、とっさに、まあいいじゃないか、まだ二百人も仲間が残るんだ、いずれは帰れるだろうと。あきらめはついた。

我々はバームが閉鎖となり、チタへ転属することになった。三百人も抜けたので、隊の編成をしなければならぬ。鳥合の衆ではチタへ乗り込めない。チタは民主運動が高揚しているところだそうだ。誰かを長にしなければどうにもならぬ。全員で一人の長を選出した。開票の結果、全く予想もしていない私が怒濤隊長になってしまった。将校幹部が五十人もいるのに私のような者が、しかし現実には現実である。逃げられるものでもない。

これも私の運命だ。学校時代先生の「態度の決定は迅速であれ」の言葉を思い出した。一生懸命だ。皆のためにやるしかない。ソ連語もわからない。どうなることか。

我々は間もなくチタへ出発しなければならぬ。チタは民主運動・文化運動の盛んなところだ。我々も少しは格好つけて乗り込もうではないか。楽器をつくらう

といたしました。アイデアを出し合つて大太鼓、小太鼓は乾燥馬鈴薯のベニヤの容器でつくつた。うまくできた。同じくバイオリンもベニヤで、弦は馬から尻尾の毛をちようだしてつくつた。楽団の名はガラクタ楽団と決めた。労働歌を元氣よく歌いバンドも結構やればできるんだ。我々はいよいよチタに向け出発した。

チタは満州里からちよつと行つたところ、ソ連では困境の町、鉄道の町である。人口は何万か捕虜の身では確かめる必要もない。捕虜は余計に神経・頭を使わないのが一番命を長もちさせる秘訣なのだ。そんなことはどうでもよいのだ。いよいよチタ駅に着き、一見引き込み線のような所で下車した。一・五キロぐらい徒歩ですすみ第二分所に着いた。キノン湖のほとりの千二百人が収容できる大きなラーゲルである。我々は一応建設寮に入れられた。三百人ぐらいが入れる半土窟兵舎である。同じ程度の寮が四つぐらゐると本部棟及び炊事食堂棟等がある。

バームから大事に持ってきた、ガラクタ楽器は一度も使わず倉庫入りになった。チタでは本物の太鼓やク

ラリネット・バリトン・トランペット・ホルネット等がずらりみんな揃っている。さすがだなど恥ずかしくなった。

我々は席の暖まる暇もなく、翌日バーム組はチタの上流四十キロぐらゐ山奥の河へ材木の筏ながし作業に行くことになった。

野宿一か月水中作業 入梅どきのこと

二百人は未経験の材木の河流し作業。テントもなく、家もなく、梅雨時で黒パンもカビている。おまけに囚人の監督である。日本人を知らないばかり監督である。牛馬用の皮のついた鞭でダワイ・ダワイを怒鳴りながら、途方もないノルマを押しつけてくる。午前中はこれだけやれ、幾ら遅くなっても昼食は終わるまでお預け。

昼食は午後二時・三時、夕食は午後八時、暗くなつてしまふ。電氣もロソクもない真つ暗の中での食事が。雨が降ってくると大変、テントも家もない。露天ごろ寝だ。柳の枝でわずか屋根などつくつてもどうにもならぬ。監督に文句を言えば、戦勝国の監視兵でも

ごろ寝だ、雨ざらしだ、捕虜の癖に生意気だという。

我々の仲間はどんどん下痢・風邪・下腹が痛む等で医務室送りとなる。木材は二十万立米・大きいもので五百キロから七百キロ加賀野川くらいの中州の山のようになり積もりあがり木材の島のようになっているのだ。

それを川下の方より一本一本鳶口で突きほぐしながら、本流に浮かび上がらせ流すのである。

三反歩・四反歩くらいもある木材の島を三分の一くらいほぐしていると水流が変化して残りの島が一度に動き出す。一本一本がくるくる回りながら浮かび上がるのである。ぼやぼやしていると木材の間に挟まれて本流の底に吸い込まれる。まさにお陀仏である。ソ連人の青年が現におぼれ死んでいるのである。絶対に事故者を出してはならぬ。木材島が動き出したら仕事は投げて避難するように徹底して指導していた。おかげで一人の事故者も出さずに済んだ。

洪水で丘に流れつき、また藪の中にひっかかっている木材は五く六人して本流まで転ばしながら搬出する。または四人、八人で吊るし出す。日本人独特の作業方

法でノルマ達成に努めた。それでも監督は依然として態度をかえず、食の問題、テントのこと、仕事のこと等、さっぱり解決しない。私は頭にきて兵たちに十分間作業、五分間休憩を命じた。それを反復して抗議の手段とした。

食糧の問題、テントの要求、作業のことでレチナンド(将校)に強く要求抗議した。レチナンドはかんかんになって怒った。ワイナプレーン、捕虜のくせに生意気だ。プロホーイ、カンバート、悪い隊長だ殺してくれ、拳銃をガチャつかせ突きつけて威嚇した。

私は、社会主義国らしくない、スターリンがこんな冷遇をせよと命じたのか、俺を殺したらレチナンドもただでは済まないだろう。レチナンドは拳銃を引っ込めた。河の中の作業では頭にきた私がやたらに休憩休憩の連発で抗議するので、監督は、ヨッポイマーチ、ばか野郎、悪い隊長だ、五分間作業、十分間アデハイ(休憩)、仕事にならぬ、殺してやると木材の上を走り渡ってきて、鳶口で私はたたか打たれた。私はまだ死なないぞ、死ぬまで私は戦うのだ。戦友を全部日本

海を渡すために。私一人くらい死を覚悟で頑張った。

そうした光景を毎日見ていた青年がたまりかねて「私でよかったら使ってください。私も覚悟を決めました。」隊長とともにこの身はいかになろうともと云ってくれました。山形青年通訳二十五歳、元満鉄調査部の人でした。私は感激しました。山形君、よく決意してくれました、ありがとうございます。

百万人の援軍を得た心境でした。本当は通訳は二十人もいたのですが、通訳をやると過去がばれて、ごぼり抜きになり刑務所送りになる恐れが多分にあるのです。過去にソ連に対してスパイ的な仕事をしていたことが発覚すると大変なことになります。それで私は通訳は頼まないでやってきたわけなのです。それから私の言うことをソ連側に間違ひなく伝えてもらうので、彼らも段々と日本兵を見る目を変わってきました。疑いから信頼へと急速に変化してきました。完全に信頼するようになりました。さすがは通訳です。言葉が通じないほど惨めなことはありません。山形君のことは一生忘れえぬ感謝感激の物語の一つです。今もどこ

かで元気で成功されておられることでしょう。

我々は二回目の筏流し作業にやられました。二回目は、テントもあり、食糧もよくなり、病人もなく、まずまずの作業になりました。流木はチタの揚木場まで流し善き上げられ、それぞれの用途に選別し、建築用材、薪などになるのだそうです。伐採、運搬は牽引車と馬に引かせて河の本流に流すのです。総監督はプロペラ飛行機で上空から作業の進行状況を検分にくるのです。社会主義国だなど、規模の大きさに感心しました。日本では想像もつかぬことでした。

昭和二十二年十二月、

反動カンパ、陰謀に抗して

キノン湖もすっかり凍ってトラックも走られるほどでした。日中でも零下三十度、冬の真っただ中、百五十人はチタ駅の色々の作業に分かれてそれぞれの仕事をしていた。私は組長として機関車の排出した水がかちんかちに凍った氷をツルハシで破碎し線路を清掃する仕事を十五人でやっていた。

そこへソ連人の老婆がやって来た。老婆は、ヤボン

スキ、お願い、ちょっとだけ三人かしてと、今は作業中なので、もうすぐ休憩時間になるから待ってと言いついて聞かせて帰した。我々の作業は五十分したら十分休憩と国際法に決まっている。休憩になったので、真壁君と三浦君ともう一人、三人を駅近くの老婆の家へ派遣した。十分になったら帰ってこいよと念を押して、さあ大変、時間過ぎて帰ってこない。十分経過してようやく帰ってきた。何の用だったのかと問い糾した。「老婆一人暮らして、薪切りも薪割りもできないので助けてほしい、作業が終わってから僅かの時間やってくれないか。お札に馬鈴薯を麻袋に一袋やるから」とのことであった。麻袋に一袋馬鈴薯あれば皆で大分お腹の足しになる。

馬鈴薯一個は血の何滴、久しぶりに皆に喜んでもらえると思はれた。三人が遅刻したのは、老婆にスープとパンを御馳走になったのことでわかりました。

私の組に一小尉と一見習士官がおりました。彼ら二人は帰隊後すぐ民主グループに告発されました。

反動分子、天皇制護持論者である、

#### 人民裁判にかけよ

建設寮三百人の真ん中に引きずり出されました。裁判官は民主グループの一人、告発の内容は若月はソ同盟の五か年計画に協力する意志がない。貴重な作業時間を三十分も欠如した。ソ同盟を強くすることは天皇制打倒を早めることにつながる、それを分かっているが、かかることになったのだから反動分子だ、偽民主主義者だ、我々の中に巢食う偽者を断固追放しなければならぬ、と言った。さらに裁判官はこの事実を認めるかと問いただした。私は、三十分の欠如は認めるが、反動呼ばわりは断固拒否する、これは私を落としたいれることにより、ある者が反動闘争に名を高めるための陰謀であると主張した。

私は兵隊の皆さんの血の一滴が欲しかった。こんなよい話はめったにないことだと思ったから三人を派遣したまでのこと。スープ、パンをいただいた三人も同列に裁判とは情けない。私が命じたから行ったまでのこと、裁判を受けるのは私一人でよいのだ。裁判長はしばらく沈黙した。やがて裁判長はおもむろに口を開

いた。若月は口が達者で罪状を認めようとしなない。寮生諸君、かかる反動分子は許してはいけない。断固処断すべきだ。いかなる処分をすべきか、諸君の意見を聞きたい。遠慮なく発言をしてください。

寮内は一瞬水を打ったように静まり、だれも発言する者はありませんでした。私を擁護する発言をすれば当然ながら反動分子として槍玉に揚げられるのが目に見えているのです。私を糾弾する者も一人もありませんでした。しばらくして裁判長は誰も発言がないので、この処分は規律委員会に付託してもよろしいかと問い質した。それでも何の発言もない。再三にわたっての催促めいた裁判長の発言に誰か一人が異議なしの声をかけた。裁判長は、それでは規律委員会に一任されたものとみなし処置します。若月は明朝出勤前、団本部へ出頭し指示を受けるように伝達する。今晚の裁判はこれで終わります。ご苦労さまでした。

### 重労働と二時間夜の残業

翌朝、私は団本部へ出頭した。規律委員会の決定が告げられた。千二百人中最重労働の現場第三煉瓦工場

掘削作業である、あらゆる公職は追放である。夜は夕食後団本部の指示に従い二時間の残業に服すること、期限は無期限である。

指示どおり第三煉瓦工場へ出かけた。おんぼろ工場である。掘削作業は大変な重労働である。地下にストープをたいて粘土を溶かし円びで鍋トロに積み込む、一台積み込むのにへとへとになる。円びから粘土が離れないのだ。まさにこの世の地獄だ。ノルマもヘチマもあつたものではない。何とかよい工夫はないだろうか、私は農民だ、四本鎌が欲しい、箱箕が欲しい、それがあれば楽をしてノルマを上げられる。もう一つ生煉瓦を乾燥室に運ぶトロッコの線路がめちやくちゃで脱線の連続、無駄骨のエネルギーの消耗である。これの解決なしには、どうにもならぬ。私は職場会議に提案した。皆は一人の反対もなく日曜日に線路を直すことに賛成した。日曜日を返上して線路を徹底して工事した。粘土を積み込む用具は簡単にはできなかったが、それからは脱線もなくなり作業も頗る順調に無駄骨を折らなくてノルマも向上したのである。

毎日粘土との戦いでくたくたに疲れ果て声も出ないくらいだ。ふらふらとラーゲルに帰ってくると今度は夜の二時間残業が待っている。

夕食後、団本部の指示で炊事場裏の汚水や野菜の屑等が凍ってつんつるてんのカチンカチンになっているのをパール（長さ一・五メートル重さ三キロの鉄棒）で割って清掃する作業。小便氷を割る仕事、大便の柱積もり積もって柱になる光の糞柱をパールで突きこわして片づける等が残業である。

望郷の湖畔と月を眺めて

零下三十五度キノシ湖湖畔の空には霧氷で月が赤く薄ぼんやりと下界を照らしていた。冷たいパール、防寒手套にしみこむ寒気、指も凍りそうだ。今夜は小便氷割りだ。私は考えた、この地球上に三十億の人間が生存している。私は三十億分の一だ。どうしてこんな苦しみに遭わねばならぬのだ。奴隷だってもっと自由もある。私には何の自由も権利もない、腹いっぱい食べる自由もない。奴隷以下だ。生ける屍だ。多くの戦友は白い飯を腹いっぱい食べて死にたいがシベリアの

合言葉である。

故郷では今ごろ三王子山の頂上より出たこの月を老父母、祖母たちは、あの煤け障子の風呂の中で眺めておることだろう、そしてビルマの弟のこと、シベリアの私のことを思い心配しているころだ。私は間違ったことは何一つしていない、私はまだ死なないぞ、幾ら辛くとも死よりは楽だ。よし負けてたまるか、これも人生の試金石だ、どこまで耐えられるか、まだ私は二十代だ。昔、山中鹿之助は、神よ汝我に百難を与え給えと言ったではないか、幾ら金を積んでもこれほどの修養道場は、また大学もあり得ない。苦しみを楽しみに転化することだ。俺はまだ死ねないのだ。祖国日本では私を待っている。祖国再建の大事業だ。

午後九時真つ暗の中を寮生たちは音楽会が終わり帰ってくる。闇の中から、若月さん、ご苦労さんです、この仇はきつととってあげます、しばらく辛抱してください、風邪を引かないようにね。ご苦労さん、ご苦労さんの声は続くのでした。

明るいとこでは余り言葉もかけられぬのが、暗や

みでは皆、私を応援してくれました。私はありがたく、うれしくて勇気が湧いてきました。「キノンのほとり丘の上、集いし我ら数千の、働くものの営みは明るく、清く、正しかる」歌を口ずさみながら、辛さを忘れるひとときとなりました。一生忘れられない夜の物語です。

### 地獄に仏 田京君との出会い

第三煉瓦工場粘土掘削現場、偶然・奇跡ともいふべきか、現場組長が何と田京君ではないか、しばらくぶりの再会であった。懐かしかった、罪人として会うとは思ってもよらぬことであった。

彼はかつて私の地区で私の後輩としてともに勉強したもともと可愛がっていた青年の一人だった。やあ、君がブルガジル（組長）か、ちっとも知らなかった。立派になったな。私は涙が出るほどうれしかった。彼は、先輩何も心配いりません、任せておいてください、先輩が来てくれたので、どんなにか勇気づけられました。何か、職場も変わりますよね。皆は先輩を罪人だなどと誰も思っていないですよ。よろしく願います。

皆は私を温かく迎えてくれました。地獄に仏と、感激しました。私って幸せなんだな、しばし罪人であることを忘れた時代です。

私は初めての現場がどんなになっているのか、つぶさに観察しました。作業の隘路はどこになっているのか、生煉瓦の運搬用線路がでたらめだ、これでは骨折り損のくたびれもうけというところ、日曜日を返上しても修復工事をやった方がよい、職場会議に提案、皆の賛同を得た。

丁度そのときスタハーノフ社会主義生産運動が展開されていた。期間は一か月である。その他、いろいろと工場現場など整備してノルマの向上に一丸となって頑張った。一緒に働いているソ連人は悲鳴を上げた。ヤポンスキー働き過ぎだ、ついていけない。もっと遅遅とやらないか。ソ連人は、欲はいらないの、怒られない程度に動いていればそれでよいの、社会主義は最低生活だけけど国が保証してくれるのと、のんきなものだ。

捕虜の我々を使おうともしないで、ブレーキをかけ



るんだから、これでは進歩も発展も望めないと思った。欲のいらぬソ連人はすべてをあきらめているのか、前途は見えずいているような気がしました。

我々は近く帰還する。このシベリアで日本人労働者の偉大な創造性を發揮し、しかもラーゲル一番の不良工場で優勝旗を揚げるのだ。可能である。とうとうそのときが来た。

一日、ソ連の最高が千百枚、遂に我々は一万三千枚に達したのである。千二百人のラーゲル中一位。優勝旗は我々の頭上に輝いたのである。日本人労働者の模範に金字塔をチタ第三煉瓦工場に永久に打ち立てたのである。

工場側は大変な喜びようで、立派な模範を示してくれました。ソ連人は日本人の残してくれたレコードに追いつけ追い越そうの運動を展開するでしょう。

私は罪人の汚名も忘れて皆と一緒に頑張った。特に田京博君は私をよくしてくれた。彼は毎日スプラフカ（作業伝票）を最高に働いたように書いてくれた。おかげで私はパンもスープも多く支給され、ほかの皆さ

んに申しわけないようだった。

あの不当残酷な裁判の判決にも耐えることのできたのも、田京博君のかけの力添えがあったればこそと、感謝した次第です。

彼は真面目で立派な青年でした。私の先輩には栃木県出身の星野広高さん、後輩には、田京博君、山形県出身の高橋弥蔵君、皆、私の命の恩人です。皆さんありがとう、おかげで七十二歳になっても、元気でこの物語を書くことができました。皆さんのおかげと心より感謝申し上げます。

私を告発した者が、逆に裁判される。

仇討ちなる

私は何も知らなかった。千二百人の中の二百人の兵たちが前にいたモロドイのラーゲルでの出来事である。五百人中二百七十人の初年兵と弱い兵隊さんがパラチフスで、わずか一週間で死んでしまった、驚くべき事実が明るみにさらけ出されたのである。

原因は、入ソ後、旧軍隊組織のまま生活していた将校グループが、特権を利用して五百人に支給された食

糧や衣類等をかすめ取り、横領し、着服したためである。兵隊たちはますます生活が苦しくなった。兵隊はがたがたに瘦せる。将校は枕パンをして寝ている。衣類も一人一人に支給されているのに、三人に一枚などと偽り、役得の限りをつくした。そのため栄養失調が続出、弱い者や、初年兵がシラミによるパラチフスでばたばたと死んでいった。将校で死んだ者はいないのである。

生き残りの兵たちは憤怒の怒りを込めて将校の罪状を告発した。その将校のうちに若月を反動にでっちあげた者が二人もいた。小尉は特に被服の係で最も悪質であった。裁判は怨念や激情のため、場内は騒然となった。二百七十人を殺したのは奴らだ、絶対に日本海を渡すな等の怒号、野次で裁判もしばし立ち往生の体たらくであった。

ソ連同盟側に頼んで、日本に帰さないようにすべきだ。二百七十人はソ同盟が殺したのではない、こいつ等が殺したのだ。憎きは反動将校らである。裁判は延々と続くのであった。

注、枕パンとは黒パンのこと、枕ほどの大きいものを一人占めして。

裁判の結末は、将校らが非を全面的に認め、帰国の晩には二百七十人の亡くなった戦友の遺族方を訪問し、墓前にぬかづき犯した罪の懺悔を続けます、絶対に嘘は申しません、血書をしたため、誓約いたします、お許しくださいと彼らは必至になって嘆願しました。大食堂の壁に翌日彼らの血書が張り出されました。一件落着とあいなった次第です。

その裁判のとき、若月はすべてにわたりとてもよくやっているから罰は解除すると宣言されました。私もソクラテスに学びながら心を大きく自らその試練に耐えてきたが、神は私を見捨てなかつたなと感謝いたしました。それもみなよき戦友が心で私を守っていてくれたのだと感涙に咽ぶのみでした。私ってやっぱり幸せなやつなんだ。これからも親を見習い、人のため世のためにやるぞと決意しました。

私の親って、こんな人間でした。

前文に私の親が出てきましたので一つだけ説明いた

しましう。

私が五歳のころでした。大正十三年七月二十五日夜来の豪雨で加治川は前代未聞の大洪水となりました。

流木は矢のように流れて来ます。濁流は高増すばかり、そんな時三人の村人が稚魚すき漁に出て河の中州で逃げ切れず助けを求めて、柳の木につかまり悲鳴を上げていました。戸数八十戸の消防団、在郷軍人、青年会等が、総出で綱を投げたりしたがどにもなりません。

飛び込んで助けに行けば自分も死ななければならぬ、万が一成功するか、だれも自信がない、手も足も出ないというところでした。三人のうち一人半中風と言われていた人がいました。その人をかばっていたため、ほかの二人も逃げおくれでこんなことになったそうです。

父は考えました。半中風の男を一人助ければ、ほかの二人は自力で右岸でも左岸でも泳ぎ切るだろうと判断した。溺れ人を救助するときは、相手が死に物狂いに抱きついてくるから、背中合わせにして沈着冷静に救助しなければならぬ。濁流と流木を防ぐには水面下

を潜り続けなければならぬ。

父は二十九歳、若き在郷軍人、軍人精神の發揮のしどころだ。一か八か神仏のご加護あれと祈念し、ざんぶと濁流に身を投じました。村人は驚きました。村人は下流へと走り出しました。濁流は小戸橋の橋げたまでとどきそうでした。人が流れてきたらと熊手を構えて待ちました。いっこうに流れてこない、流れていったのは魚網だけでした。

村人は、どうなったのだ、死んでしまったのではと大変心配しました。父は予定どおり二百メートル下流の右岸に溺れ人を抱えて上がってきました。村人は喜び驚きました。私はまだ五歳、あどけない子供でした。父は流木にやられて全身傷だらけでした。うちではすすけたあばら家の囲炉裏に杉っばを燃やし、命拾いた父の体を温めてやりました。

人命救助の勇敢なる行為が広く世にひろまりました。大正十三年八月三十一日、帝国在郷軍人会会長元帥陸軍大將正二位勲一等功一級子爵川村影明より決死濁流ト戦ヒ幾度カ瀕死ノ状態ニ陥リツツモ遂ニ能ク救助

ノ目的ヲ達成セリ其勇敢ナル行為ハ真ニ軍人精神ノ発  
揮ニシテ一般世人ノ模範タルモノト認ム拠ツテココニ  
其篤行ヲ表ス

金一封を添えていただきました。また警察署長からも  
表彰状と金一封をいただきました。父は貧乏でおしん  
の時代の小作農民で苦勞した人です。私はシベリアに  
抑留され、二男はビルマで足を三度も切断のすえ最後  
は空爆で悲惨な戦死となりました。父は私が昭和二十  
四年十二月帰還して翌々年亡くなりました。戦争がな  
ければまだ死ななくてすんだものと思っています。心  
配事、神経の使い過ぎが胃に祟ったと思ひ、戦争が父  
を殺したのです。自分も貧乏なのにそれよりも困って  
いる人には頼まれると嫌と言えない人でした。父のよ  
うに命をかけるようなことはなかなかできそうもあり  
ませんけれども、少しでも父に近づかねばと思います。

ソ連のA軍曹について

背の高いなかなかの美青年軍曹と私ら十人は、貨車  
に木材を積み込む作業のためチタより四十キロくらい  
山がわのとある駅に派遣されました。A軍曹は監視兵

と監督ってわけでした。そのころはソ連人もすっかり  
我々と仲良しになって信頼関係はお互いさまで心配す  
ることもありませんでした。のんびりした雰囲気で作  
業もぼちぼちやっていきましたよ。

現地へついた。家が二棟あった。一棟は私達の宿舎  
に決まった。十日間ぐらい泊まるのだから部屋を片づ  
けたりした。食事の準備も手分けしてやった。夕方に  
なり、薄暗くなってきた。ロソクもない。もちろん  
電気などあるわけがない。いくら捕虜でも目明きな  
で明かりがなくては困るな等とこぼし始めた。

昔、塙保己一が、目あきは不自由だなどといった言葉  
を思い出し、皆で笑っていた。そこへA軍曹が石油ラ  
ンプをもってやってきた。軍曹はこれを使いなさいと  
一つのランプを差し出した。一つのランプ「軍曹はラ  
ンプあるのですか」軍曹は「一つしかないんだ。一つ  
あれば間に合うだろう」と言った。「私は間に合うけ  
れど軍曹は」と問い返した。軍曹はにこにこしながら  
「君たちだけ間に合えばそれでいいじゃないか」「そ  
れでは軍曹が真っ暗な空き家で一人で困るでしょう」

「全然困らないよ。十人が明るいとところで暮らすべきだ。私一人我慢すればそれで済むことだ。気にしないでゆっくり休んでくれ」。

軍曹は、ソ連では当たり前のことなんだ、と言いつつ、ランブを渡し、自分の空き家へ帰っていった。そして十日間我慢して暮らしたのである。多数のためを考えるそのおらかな心に、島国根性の我々は見習わねばと皆で感心した次第です。

ソ連を知らない多くの日本人は過去の「反ソデマ」を信じ、あまりにも無知だとみずからも反省しました。バームのイワノフ・ホーチャにしろ同じくバームのポリシエビキ党员やA軍曹の親切さ、自己犠牲。奉仕の精神等、四年半のシベリア生活において書けばまだ幾らでも物語はあります。我々日本人が見習わなければならぬこと、反省しなければならぬこと、人生経験豊かになったと思います。

シベリアで失ったものは青春、得たものは不屈の根性でしょうか。私は昭和二十四年半ば、チタよりコムソモリスクへ行き、そこで町の労働者アパートの建設

に従事しました。コムソモリスクはアムールの川沿いにある街で、土地は平らでどっちなかといえ水はけの悪い湿地がかかったところです。そこでアメリカ製の超大型トレンチャ、掘削機械で大暗渠を敷設して、その上にレニングラード、今はまた変わったトログラードと同じ設計の市街をつくるのだそうです。

アムールの河港から町の道路じゅうに軽便鉄道を走らせ礫や砂、材料を運ぶのです。当時としてはさすがだなと、やることの大きさに感心しました。日本のように用地買収の煩わしさが全くないわけです。羨ましいなと思いました。

この街でナホトカからのダモイの知らせを待ったわけです。毎日毎日まさに千秋の思い。早く船が、マッカーサーは何しているんだ。仕事も手につかないといった感じでした。

ソ連側では、日本が船を意識的に回さないの、困っているのだ。早く君たちを帰してやりたいけれど、どうにもならぬのだという。我々は戦争に負けたのだから船もないし、仕方ないと半分あきらめもしていた。

それでも皆は今少しの辛抱だとお互い戒めたり、励ましたりしていた。

日本海を平和の海に 不戦の誓い

昭和二十四年十一月下旬、今から呼ぶ者は速やかにダモイだ帰国だ準備せよ。

遂にきた。待ちに待った帰国だ、目指すはナホトカだ。しかし散々騙されてきた我々は船に乗るまで信用できないのだ。スコーラ、ダモイは嘘の代名詞になっていた。

四年半聞かされたスコーラ、ダモイが現実になったのだ。今後こそは本物だ。我々しか残っていないのだから、そう言えばそうだな。自信がわいてきた。

ナホトカだ、港町の朝は海辺に薄水がはっている。

一応不凍港になっている。ウラジオストックのすぐ隣の港だ。ウラジオは軍港なので、ここが指定されているのだ。山をユニボが掘削していた。初めて見る建設機械であった。彼らは自慢そうに、日本にもあるか、ないのだけれど、しゃくだから日本にはそれより大きい機械が沢山あると言った。彼は嘘つきヤボンスキー

ヒートレだずるいと大笑い、本当は日本では見たことがないのである。ナホトカは建設ブームで大盛況の感があった。

ナホトカ最終集結地は船待ちのの人たちで超満員であった。一坪に四人、五人廊下までぎっしりで寝るところもない。寿司づめだ。まいった、まいった、潰けいわしだ。仰向けになると寝られない。横になり足、頭、足、頭と交互に寝なければならぬ。夜中に我慢していたおしっこも限界に達した、行かざばなるまい、抜け出すにも一苦勞。

やっと目的を達成し爽やかな気分帰ってくる。もう寝るところがない。一人抜けると隣のねぼすけ等が急に無意識のまま仰向けになり解放感に浸っている。足の爪先すらもいれるところがない。オーバーな話ではない。もう人の上に重なって寝ようかと思うくらいだ。翌晩からは水気一切取らずに寝たら最後朝まで、動かぬぞと決意するほどだった。

早く船を持ってこい、またどこかへ連れていかれてはたまったものではない。十一月末、もう本格的冬だ。

飯盒の「つる」が指から離れない。ドアの「取っ手」には布きれが巻いてある。おかしいのは便所だ。海辺へ三十メートル長さの橋をかけ七十センチ幅の板を二枚並行させ、中を丁度よくあけてある。なかなかよい発想だな。

これもヤボンスキーの誰かがつくってくれたのだろう。相当の人員が消化できる。万からの人がいるんだ。そんな橋便が五く六本もあった。ナホトカの思い出も糞でおさめようとは考えてもいなかった。

昭和二十四年十一月二十八日、栄豊丸が岸壁に待っている。飛び立つ思いで私の姓を呼ばれるのを待った。ワーカーキー ターローベエ疑いなく私だ。遂にやった。私も走った。呼ばれると皆走る。ちょうど「鶏」が鳥小屋から開放されたように、動物的本能なのか。そのうれしさは筆舌には表現できない。

ソ連の税関はただ書いたものを持っているか、持っていない。ハラシヨ ダワイ ダワイ 何にも調べない、これでOK。日本人同士がタバコは五十本だとか品物はどうか心配げなことをデマっている。日本

人の悪い癖だ。

岸壁には大勢のソ連人が見送りにきていた。我々二千人は足取りも軽くタラップを上がった。ダモイもよいよ本物だ。誰か頬をつねっていた。痛い、夢ではないぞ。解放感満喫だ。この瞬間を六十何万の同胞が待ち望んでいたにもかかわらず、不幸にして帰らぬ人となった同胞が何万もいるだろうと思うと心が沈むのである。静かに合掌して別れを告げるのであった。

いよいよ出航だ。手を振る者、ハンカチを振る者、期せずして船と岸壁の人々が一つになってインターナショナルの歌のコーラスが始まった。

いざ戦わんいざ奮いたていざ、ああ、インターナショナル我らがもの

素朴で親切で純情なソ連人の皆さん、ルスビダーニヤ、さようなら、うれしさと別離の悲しさが入り乱れて、涙が頬を伝うのでした。人間同士みな同じ、戦争はやってはならぬ。岸壁の人、船上の人も心は一つ、不戦の誓い、歴史に深く刻み込んでおこう。

日本海を平和の海に

お互い見えなくなるまで別れを惜しんだ。船は湾を出て、進路を祖国の方向にとり舞鶴へと向かった。

船室は入隊するときの馬糞だらけの輸送船と違い曇敷き、新しい毛布、広々とした部屋、お座敷にいるようだ。入隊のときは玄界灘で船酔いしてまいったけれども、全然揺れない。お座敷にいるのと同じだ。食べ物も黒パンでなくコッペパンだ。黒パンはもう永久におさらばだ。タバコをもらった。光である。マホルカを吸っていたのに、やはり祖国のタバコはうまい。

やっと人間回復の感を覚えた。食欲も出てきた。船の速度が遅いんだな、もっと早くならないのか、じれったくなるのでした。もう時間の問題だ。もうここまで来たんだからシベリアへ帰ることはないんだ。思い思い好き勝手なことを言っている。

祖国が見えてきた。甲板に上がってはしゃいでいる。甲板はいっぱいの人、祖国が霞がたなびいて見える。

夢に見た祖国十年ぶりの日本、皆涙ぐんでいる。敗戦の惨めさ、どうなっているだろうか、心配だ。空襲でやられた傷跡は、故郷の山河は、人々は、懐かしさ、

不安、喜び、うれしさで頭の中は交錯している。だんだんはつきり見えて来た。舞鶴だ。寂しげに煙の出ない煙突ばかり、霞、霧だけが暖かく祖国を包んでくれているようだ。

冷たい氷の海からおさらばして、いつしか暖かな暖流の海を航行しているのだ。甲板で十人ぐらいの集団が、突如胸に日の丸のバッチをつけ、海行かばみずーく屍、山ゆかーば、苔むす屍の歌を歌い出した。その中の一人がアジ演説を始めた。「今まではソ連の支配下にいたので、それに合わせてやってきた。これからは違う、吉田内閣、マッカーサーの支配する日本国だ。皆、日の丸のバッチをつけるのだ。シベリアでは一部のインテリグループに振り回されて、我々はひどい仕打ちにあえいできた。もうその心配はない。バッチをつけて堂々と上陸しようではないか」盛んにバッチを配り始めた。しかし我々は皆それを無視した。

日本軍国主義の犠牲者はさすが立派であった。大佐も少佐もつけなかった。少佐は私にどうしようと思ってきた。私は、もう本土だ、あなたの自由意思で決め



なさいと返答した。少佐はわかりましたと帰った。少佐はパッチをつけませんでした。少佐は新潟県出身です。独歩の大隊長でした。一時は皆動揺したけれど、間もなく平穩にもどりました。

二千人を乗せた栄豊丸は無事静かに舞鶴湾に到着しました。錨をおろしました。すぐにも上陸したいのにいろいろの事情で一晩船の中に泊められました。実に長い一晩になりました。十二月二日の夜でした。

唄「岸壁の母」で有名な桟橋に三日朝足取りも軽く一列に並んで上陸しました。十年ぶりに見る内地の娘たち、モンベ姿の黒髪が連発するご苦労さまでしたの声に感激、歓喜の桟橋でした。

### 【執筆者の紹介】

現住所 新潟県新発田市小戸一二〇四  
本籍地 新潟県新発田市小戸一二〇四  
生年月日 大正九年二月二十五日  
入 隊 昭和二十年三月九日

松風不朽一二三師団歩兵第二六九連隊

終戦時の居住地 満州北孫吳南花台陣地

入ソ日 昭和二十年九月一日

抑留地 パーム、チタ、コムソモリスク

作業 伐採、鉄道、道路、建築、機械、農業

引揚 昭和二十四年十二月四日

引揚船 栄豊丸

上陸地 舞鶴

(新潟県 吉田 忍)

## 地獄のシベリア強制抑留

東京都 鳴崎 武男

### 一、はじめに

第二次世界大戦(太平洋戦争)に従軍し、終戦とともにシベリアで虜囚の生活を送りながらも、幸いに生き残ることができた。

この戦争初頭、アッツ島に米軍と対峙して玉砕した戦友たち、南方戦線の怒濤の中、藻屑と消えた戦友た